

出演 林葵衣(美術家)、今井祝雄(美術家、元具体美術協会会員)
聞き手 妹尾綾(尼崎市文化振興財団 学芸員)
日時 令和5年3月19日(日) 14時～16時
場所 A-LAB ロビー



トークイベントの様子

妹尾綾(以下:妹尾) 本日、進行をさせていただきます、尼崎市文化振興財団学芸員の妹尾綾と申します。よろしくお願いたします。出演者のお二人をご紹介します。個展の出品作家で白髪一雄現代美術賞第1回受賞者の林葵衣さんです。

林葵衣さん(以下:林) 林葵衣です。ありがとうございます。

妹尾 具体美術協会の元会員、今井祝雄さんです。

今井祝雄さん(以下:今井) よろしくお願いたします。

妹尾 お二人は実は、以前から、一緒にお仕事もされたことがあるということで、色々なお話を伺えると思いますので、よろしくお願いたします。その前に、白髪一雄現代美術賞というものについて、少しご説明をさせていただきます。白髪一雄さんは、今井さんと同じく具体美術協会の会員として活躍された現代美術作家でいらっしゃいましたが、尼崎市の出身でお生まれから亡くなるまでずっと尼崎で活動されてました。住んでおられただけではなくて、非常に尼崎市に思い入れがあって、作品をたくさん生前に寄贈していただき尼崎市の所蔵作品になっています。亡くなられて5年後に、それを常時観ていたく場所を作らないといけないということで、白髪一雄記念室を作りました。白髪一雄さんという画家を通じ

て、尼崎市をアピールすることにもなるということで、市を挙げて取り組んでいます。来年(2024年)はちょうど白髪一雄さんが生誕100年に当たる年で、より一層白髪一雄さんを知っていただく機会になるということで、今取り組んでいます。その中で白髪一雄さんという方を伝えていくというだけでなく、今度は新しいアーティストを生み出す尼崎でありたいということで、現代美術賞を設けて、あるいはA-LABという場所も若い方を尼崎から生み出していきたいということで、活動しています。具体美術協会の会員の皆さんが、「グタイピナコテカ」というA-LABのような発表する場を持っていました。そこにいろんな海外からのアーティストが来て、交流を重ねて、現代美術センターみたいな場所だったと聞いています。白髪さんのことをご存知だった今井さんから、その活動、具体のことなどお話を頂ければと思います。よろしくお願いたします。

今井祝雄 × 具体

今井 今井祝雄です、よろしくお願いたします。尼崎は、久しぶりなんですけれども、結構尼崎との関わりもあるんです。一番最初は白髪さんのアトリエをお訪ねしたこ

とですね、1960年代ですけれども、1964年に「第14回具体美術展」が大阪の高島屋でありまして、その時に初めて出品したんですね。白髪さんとお会いしたのもその時が初めてだったのかなと思います。当時の私は、まだ17歳だったんですよ。たまたま17歳の終わりの頃に心斎橋で個展をしたわけですが、この時に具体の人たちに観に来て頂いて、口づてにいろんな具体のメンバーが来られてですね、最終日に代表である吉原治良さんが来られて、その時に「2か月後に高島屋で具体展するからよかったら持っといで。」とお誘いを受けて。それがきっかけで出すことになったんですけども、先程妹尾さんからお話がありましたように、土蔵を改造したグタイピナコテカという小さい美術館が大阪の中之島にあったんです。芦屋が具体の発祥地であるんですけども、活動の拠点が大阪に移ったんですね。私は、大阪の住吉に住んでいますけれども、足繁く搬入や搬出、当番とかですね、あるいは会議があったりでそこへよく行っていたんですね。そういう意味で、ピナコテカという土蔵の美術館ですけども、そこが美術大学へ行かなかった私にとっては「具体大学」という風に位置付けているわけです。尼崎ということでは、'70年万博に屋外彫刻として出品しました《3トン石》という作品があって。万博は半年ですね、開催されて終わった後、ほとんどの建物は、取り壊していくことが前提で、会場に置いてあった彫刻なんかも終わってから所有権は万博協会になっていますので、近辺の市町村に、希望があれば寄贈するということで。何故か私の作品は尼崎市に寄贈されることになって、設置する時に初めて橘公園という所に行ったんです。大きい自然石で上から白い塗料を、半ば



今井祝雄さん

ぶっかけたっていうか、半ば石の肌が見えてとか、自然と人工とのせめぎ合いみたいな、そういう作品だったんです。公園に置かれているものですから、子どもが靴で踏んづけたり乗ったりするわけですから、ペンキが自然に剥がれて、ただの石になっているんですけど。(笑) ある時に万博のいろんな遺跡を訪ねるマニアがいて、その人が写真を送ってくれて、現状こうなっていますよと。それで改めて僕も見に行ったんですけど、石の窪んだ所にわずかに白いペンキの痕跡が残っているという状況でした。具体解散後は、それまでは空間造形的な作品を作っていたんですけど、空間だけではなくて、時間も作品に盛り込めないかということで、写真であったりとか、あるいはその頃8ミリブームの後にビデオが1970年代の終わごろから普及して、ビデオも使うようになったり、ややコンセプチュアルな作品を具体以降は作るようになったんです。僕はその後滋賀の成安造形大学に教えに行っていたんですけども、彫刻だったら石や木や鉄とかですね、それが素材になるわけですが、私の学生たちにはそういう風に決めないで地球上の物すべてが素材であるというように指導をしていましたね。その中で映像作品から、特に80年代に入ってから街の中の彫刻とかオブジェですね、いわゆるパブリックアートをやりだしたりするわけです。尼崎市はそういう点では、ちょっと進んでいて、今日も駅前に行くと、速水史朗さんって知っていますか?石の柱に円盤のような石が載っていて、本当は水がだーっと噴き上がるんですけどね。狭い場所に設置しているので、水が周りの人たちにかかるので、止められて久しいですけど。



3トン石(2023年8月 橘公園)

そのほかにも近松公園に近松門左衛門の銅像があったり、その近隣に小林陸一郎さんという人が作った抽象的な作品があったりとか、街の中に彫刻がけっこうあったりするわけです。そういうものを僕はリサーチしてしまっていて、何度も尼崎市を訪れたりしていたんです。近年はそういう素材を限定しない、いろんな仕事をやっていますが、話し出すときがないのでちょっとこれぐらいにしておきたいと思います。白髪一雄現代美術賞ができたことを非常に嬉しく思っていて、よく個人の名前を冠した賞なんてありますけども、中でも一番応援したい、そういう風に思っているんですね。それは何故かという、単に絵とか彫刻を集めて品評会のように選ぶだけではなくて、成果物として、個展として見せる、そういう意味で単なる品評会ではないコンクールとして非常に期待しているところです。その第1回目に林葵衣さんが選ばれた。彼女との最初の出会だけ話しますと、芦屋市展に応募されていたんですね。私、その時審査をしていて。実はこれも白髪一雄さんの後任としての審査員だったんですね。ある時電話があって、「今井君。わし、しんどいから後やってくれへんか。」ということですね、審査をやりだしたんです。その時に出品された林さんの作品、ちょうど展示室にありますが、スタンプをいっぱい押し了一見抽象画的な作品ですけども。その時に吉原賞という賞が付いたんですね。吉原賞というのは、吉原治良の遺族の方が出している賞なんです。最初に吉原賞、そして今回白髪一雄現代美術賞ということで、具体との縁を非常に深く感じるところですね。

妹尾 具体美術協会のメンバーの方々は、吉原治良さんという方が「人まねをするな」ということをずっとおっしゃっていたということで、それぞれ個性がありますので全員が同じようなスタイルではないんですけど、特に白髪さんの場合は、身体性であるとか行為というものが一番重要なところになってくると思います。林さんと全然スタイルは違うんですけど、強く感じさせる作風でいらしたので、この賞を取られた意義というのはすごく大きいかなと思っています。それでは林さんにご自身の活動をご紹介していただきたいと思います。

これまでの制作活動について

林 ありがとうございます。今回白髪一雄現代美術賞を頂いて、私も今井さんにお話しさせていただいたみたいなのが具体の方々とかご縁をすごく感じると同時に個人的には他の賞にも応募はしているんだけど、選んで頂くのが具体の賞であるという事実も受け止めて、自分が元々身体的なことに興味を持って制作しているということがあるので、その自分が気になっていることの軸はぶらさずに制作を続けていきたいなと思っています。自分のこれまでの制作についてを出自も含めて少し紹介していけたらと思います。私は1988年の京都府生まれで、2013年に京都造形芸術大学（現：京都芸術大学）を卒業しました。美術家として自分の身体と自分の意識、意図とのズレの可視化、また見えないもの、音声であるとか、歩くということとかを可視化するということをコンセプトにしています。近年の活動としては、京都で制作をしているので、京都で個展をしたりとか、大阪でも展示をさせていただいたり、2021年に高松市美術館で第4期常設展で作品を出させていただきました。高松市美術館は白髪一雄さんの作品を所蔵してしまっていて、その作品のお隣で制作させていただくというコラボをさせていただいたりということが、偶然ありました。という風な形で近年は活動しています。ここからはちょっと遡ってなぜ身体を使う作品を作るようになったのかということとを少しご紹介できたらと思います。昔、私は絵を描いていまして、自画像というか、イラストでもあるしちょっと植物が生えているような、鮮明な色を使った作品を主

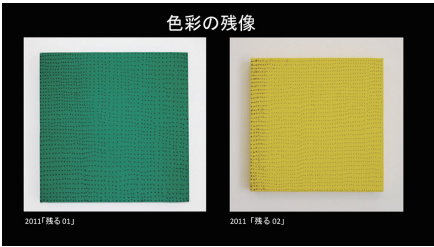


林葵衣さん

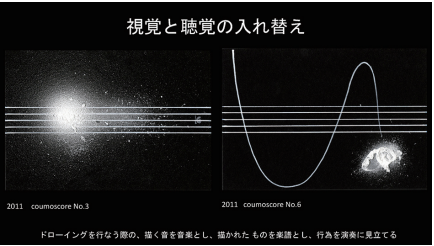
に描いたり、後は風景画ですね、自分が見た景色とか風景に編集を加えて植物がばっつと生えているようなものを描いていたんですけど、それをずっと描き続けていくことに行き詰まりを感じて、なぜこれをずっと描き続けているんだろうってことを考えた結果、もっと自分自身の動き自体を描くことは出来ないだろうかという方向に進みまして、自分の見ているものを描くということから、自分の身体の反応自体をアウトプットできないだろうかということを考えて、スタンプを繰り返し押すような作品を作っていくようになります。



これは、スタンプのシリーズなんですけど、同じスタンプ、アルファベットの「R」と「E」のスタンプを真っ直ぐラインに沿って出来るだけ真っ直ぐ引いていくんだけど、どうしても定規を当てていないのでズレてしまう。でもそのズレ自体が「自分」なんだということを考えてやっている作品です。身体を使うことで起きたズレというのは、1回目に押したスタンプと2回目に押したスタンプがズレてるそのズレ自体が、「自己」ということで考えて制作していました。色彩の残像は、補色の関係で緑と赤とか黄色と紫っていうその補色ということでこれをずっと見ていると網膜にこの点々が残るんです



ね。この作品から目をパツと離しても、点々が残っていることで、絵から目を外しても何かが残っている、何を見ているんだろうみたいなことが面白くてそういう作品を作ることもやっていました。これも身体の反応ですね。ドットが網膜に残って本来の図や形が目を外したら見えなくなるという視覚の曖昧さを見ている作品です。



それ以降やっているのが、音に注目する作品で、この作品は自分が描いてるドローイング中の音を音楽として録音して、描かれたものを「楽譜」として、やっている行為を「演奏行為」という風に見立てて作っています。スプレーをシュートと噴いている時の音とかを録音して、それを聞くことでもう1回この楽譜が再現可能なんじゃないかという作品です。描かれた痕跡を見たら音が再現できるということは、楽譜という前提でやっています。この作品を作ったことによって、鳴っている音とか喋っている音を図像としてもう1回描けないだろうかということで《Phonation》という作品が生まれました。唇に口紅を塗って喋る、いろんな壁とかに喋ったその口の動きを音声として展示している作品です。これに至った経緯としてその視覚と聴覚の関係を入れ替えた作品を作ったことで、図像として声だったり音を残せないかと思い、音声を録音とは違う別の記録の方法を探り始めました。《Phonation》を始めたきっかけは、化粧を普段するんですけど、化粧しているものを落とすときにティッシュで口紅をギュって拭うんですけど、その拭ったティッシュ自体が絵具の転写に近いなと思っていて、そのティッシュ自体をキャンバスに置き換えてみたら、喋ってる人が見えるというか、その口紅に喋りかけられているように見えて、それがすごく面白いなと思って、これをいろんな場所で出来ないかなということで、口紅

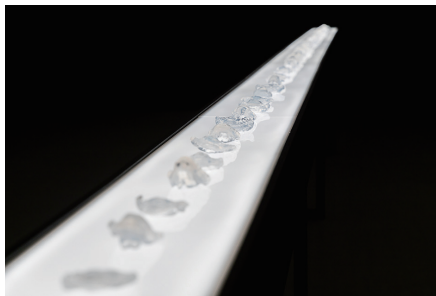


を使用した作品を作るようになりました。

音声成形にはしているんですけど、音声に限るわけではなくて重力、例えば足を踏みしめて歩く時にかかる足の重さとか、後は運動は身体の動きとか、時間というものを形にできないだろうかということを考えながら制作を進めているので、その制作の方法というのが目に見えない存在の形をまず見つけるということから始めて、日常生活を改めて見つめるとアイデアの連鎖が起こる。先ほど今井さんがおっしゃっていたように、支持体は地球上に無限にある。だから選ぶところから制作が始まっていると思っています。日常生活の中から自然に自分が掴み取れるものじゃないと、納得いくものが出来ないなと思っていて。それが見つかればアウトプット出来て、また次の作品に進めるという形で制作をしています。

妹尾 ROOM1 で展示しているようなタイプの作品について、詳しく教えてください。作り方とか。

林 ROOM1 にはポリエチレン樹脂で作った作品を置いているんですけど、長い展示台に塊の樹脂が置かれています。口の中に樹脂を入れて、口の形を「あ」で型取りして出していて、左端から50音、「あ」から「ん」を並べて出しているものになります。使っている樹脂は、



ポリエチレン樹脂ですけど、お湯で柔らかくなって水で固まるというタイプのもので、口の中に入れた時は結構熱いんですけど、その熱い状態で型取りして取り出して、水で冷やして洗って固めるというような形で制作している作品です。

妹尾 今までは何か他のものに転写していましたが、これは自分から離れたような感じがしていたのでしょうか。自分の中で作品が生まれたという、すごくリアルな形がそのまま出てると思うんですけど、今までのスタンプを押すとか、プリントして形を版画みたいにするのは、少し違うのかなと。

林 そうですね。自分の口の中が360度で見ることが出来るのはすごい面白いなと思っています。しかも手に取れるし、重さも樹脂の重さですけど感じられるし、置いとくこともできる。置いとくことは人が触ったりすることもできるし、壁に付いている状態じゃないものが出来るというのは、おっしゃる通り独立したものになっていて、少し違うアプローチというのが面白いなと思っています。口紅の作品を作ったからこそ口の奥の事を考えられたというものであって、口紅だと唇の形は結構分かるんですけど、口の奥でもっと複雑な動きが起きていることをアウトプットできないだろうかと考えてこの作品に至りました。

妹尾 ありがとうございます。作品それぞれの特徴はまた後で展示の解説の時間があるので、そちらの方で伺いたいと思いますけども、今井さんと林さんが、コラボしてパフォーマンスをされたことがあるということで、それを紹介して頂きたいと思います。

コラボパフォーマンス

今井 2021年、2年前ですかね。滋賀県に障害のある方のアートと健常者のアーティストの作品と一緒に並べて展示するギャラリー「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」という民家を改造した小さな美術館がありまして。そこの企画を頼まれました。障害のある人の作品で、いっぱい字をびっしり画面に書き連ねるような傾向の作品も結構あるんですね。現代美術でも、文字を

扱った、あるいは言葉を扱った作品というのが少ない。そういうことで僕自身も文字を使ったりしていますので、「文字模似言葉(もじもじことのは)」という展覧会を開催したんですね。出展者は、障害のあるアーティスト数人と、現代美術家数人です。林さんも文字を造形化しているわけじゃないんですけども、文字を切り口に作品、パフォーマンスをやっているということで、和風の波打ったようなクラシックなガラスの上に唇拓を表現されたりしていたわけです。その時初めて口の中を型取った立体物の作品も展示されていました。その展覧会の初日にパフォーマンスを行いました。当時コロナの真っ最中ですから、どこの店に行ってもアクリル板が目について、アクリル板を使って、アクリル板の向こう側とこちら側ということで、向こう側に私が居て、手前に、林さんが居るわけです。そのまま掛け合いみたいな形で、別々の事をするんじゃないくて、僕は憲法9条の文章、条文という長ったらしいイメージがありますが、実際に字を数えてみますと点と句読点を省いたら、たった120字なんです。その活字の一つ一つを発声しながら向こう側から貼り付けていくわけです。その発音に呼応しながら林さんが手前から唇で言葉の動きを捉えていくという、同時進行で呼応し合う形のパフォーマンスです。**林** アクリル越しに私がブチュってやっているこの顔を今井さんに見られているというのが、私はすごくなんとも言えない気持ちでやっていました。(笑)**今井** でも立場逆にしたら観客に向くので、それを配慮して観客に背中を向けてやってもらいました。けど僕はあまり見てなかったですよ。次にどの字を貼るのか一生懸命でしたから。(笑)**林** 120枚。



© ボーダレス・アートミュージアム NO-MA



今井 そうです。120枚ね。透明の接着剤をつけてアクリル板に張り付けていくわけですね。

妹尾 これはぶっつけ本番なんですか？

今井 そうです。でもどういう風にするかは、かなり。**林** 事前の打ち合わせは、今井さんが小さいアクリル板を用意してくださって、こういう風に活版を貼っていくのでって。1回テストはしましたが、大きいアクリルは現場で初めてでした。

今井 今回、彼女が展覧会で杉山平一という、詩人の詩を素材に作品を作っておられますけど、僕自身もですね、70年代のル・クレジオというフランスの文学者、その人の小説を扱って字を重ねて読めなくなるような版画を作ったり、90年代には永田耕衣(ナガタコウイ)という人の俳句を3文節、5・7・5ですよ。それを3原色に分けて、ずらして重ねる。そういうシルクスクリーンで刷ったような作品とかですね。近年は、既成の文章を使った作品を作っていますね。そういう点でも林さんと共通する所があるのかもしれないですね。

林 詩人の方だったり、文学者の方が書かれたテキストを使って、自分で考えたテキストとは全く違う形が現れてくるなというのが、私はおもしろいなと思っていて、全く自分が考えてることとは別の方向から素材を買っているような。選んでいるのは自分なので、何かしらの引っかかりがないと選ばないですけど、選ぶという所から制作は始まっているのかなとは思いますが。

今井 選ぶと同時に「出会う」ということですね。

林 そうですね。

今井 この展覧会のために尼崎で制作されたということですが、杉山平一という名前は知っていたんですけど、尼崎と関係が深いということは知らなかったですね。

林 お父さんが工場の社長で、杉山さんもその工場の経営に携わられていたことで、壮年期に執筆活動も行いながら、詩の活動にこの場所で行き組まれた。その事を、たまたま SNS で知りまして。こんな面白い人がいるんだということで図書館に行って調べたら、杉山平一特集みたいな棚があって、そこでいっぱい詩集を見て、声にまつわる詩が、私が調べただけでも4点近く書かれていてこれはおもしろいなと思って。実際書かれているテキストも「視覚情報は無くなっても、音声の聴覚の情報は残っている」ということに注目した詩を沢山書かれていた。日がどんどん暮れていって、この街のポストの赤とか木の緑が見えなくなっていっても、子どもがはしゃいでる声とか水を使う音とかを、変わらず聞こえるねということを言っている詩があって、すごくなるほどなということで、制作モチーフとさせていただきました。

今井 考えてみればですね、言葉、文字よりもまず音声というんですね、それが一番最初にあるんですね。それを何かしらの形で留めたいということで、記号や文字が生まれたわけですよ。

林 そうですね。聞こえてくるということはすごく強いなと。声を発するということもそうですけど、耳はなかなか塞げないし、入ってくるものも多いなと思います。私が今井さんと初めてお会いしたのは2015年の芦屋市展なんですけど、その時以来、いろいろな場所で作品を拝見していて、共通点というところがあるんですけど、今井さんが昨年の10月に本を出版されていて、その本の中に《円》という映像の作品が掲載されていて、その作品を見たときに「あれ、これなんか私、同じようなことを考えて作ったなー。」みたいな作品があったんです。

今井 映像といっても、何も映っていないんですね。黒味のフィルムというものがあって、映画館で映像を映す時に最初に白い画面にするために黒いフィルムをつけるんですね。そこからだんだんと映画が始まっていくようにするわけなんですけど、その黒味の16ミリフィルムに5mmの穴をパンチでコマずつ開けていく。1秒間に24コマなので4分ほどの映像作品なんですけど、大変な作業です。それを劇場みたいな場所で上映する作品で

す。数年前に大阪でインスタレーションの形で展示もしました。

林 修了制作では、1m×1mのキャンバスに色を3色塗って、最後に白色を塗って、この右上のツブツブが綿棒で、その綿棒に絵の具を溶かす溶剤をしみ込ませて、絵画の壁面にくるくるって押し当てて回転させて絵具を取っていく作品なんですけど、その絵具を取った穴を1点1点撮影して、映像にする作品を作っていました。この作品を作ったときは、その作品を存じなかったんですけど、私はこのとき「消す」ことについて考えながら作品を作っていて、消えたってことはどういうことなのかを考えていたんですけど、今井さんの作品に出会ったときに、今井さんの作品自体は穴に何もみないなところがすごく面白いなと思って、映っているのに「何にも見えないものを見ている」みたいなところが、「なるほどそういうやり方があったのか」と思って、すごくスマートなやり方で何もないことを表現しているんだなというところで共通点というか近いものを感じました。

今井 僕の場合は、真っ暗な中に穴が空いてるわけですから、そこを光が通るわけで、明るく映るのはスクリーンなんです。だから言ってみれば丸いスクリーンを四角いスクリーンの上に作りだしているというような。これは具体時代の昔の作品ですけども、たまたまペルギーで個展をしたときに、小さい部屋があって、そこでその作品だけを壁いっぱいに映したんですね。その部屋は床も天井も全部白だったものですから、立体的な空間自体がスクリーンみたいだということで、アートコートギャラリーでも上映展示したんです。ですから、林さんの行為も一つの映像作品を作るためにやったわけじゃなくて、こういう作品を作ったことによって、映像が生まれたんですね。

林 そうです。

今井 作った作品からどんどん派生した形で別のものに展開していく、そういうことは僕の場合も多いですね。制作の中で次の発想が生まれるというんですかね。だから頭の中だけでは出来ないんですね。制作の過程で次の糸口が見つかる、そういうことも結構多いし、大切なことだと思いますけど。

妹尾 フィルム、物自体に関心があったということをおっしゃってましたよね。だから、映像作品を作りたいということではなくて、物質そのもの、フィルムというものに関心をもって、ここに穴を開けてみたらどうなるのか、映像にしたらどうなるのかというように、どんな膨らんでいくということでしょうか。

今井 当時、白い四角もしくは不定形の画面に膨らみがあるような作品を作っていたんですね。その膨らみの頂点に穴がある作品もあるわけです。何を表現したかったかというと、いわゆる普通のキャンバス、絵というのはキャンバスの平面の支持体の上に絵の具が乗っかっているだけですが、キャンバス自体が膨らむことによって、表面と「向こう側」を意識するわけですね。また穴が開いていると、穴の向こう側も意識する。2次元の感覚が3次元になっていく、そういうことに関心があったんですね。だからフィルムにも穴を開けたわけです。なのでそれも僕のそういう関心から派生した作品なんですね。初めから作ろうとしたんじゃなくて日々の制作の中から生まれてきた作品かなと。作品を作るということは、設計図通りにできるわけじゃなくて、制作している中から得るものというのが結構あるんです。だからやっぱり手を動かしたり色々試したりすることは大事だなと。この3年間、コロナ禍で外に出れない、また10年前に大学も退任して、あまり外に出かける必要がなくなったんですね。週に一度ぐらいしか外出しないんですけど、家に居る時間に何か思いついたらいろんなことをやったりできるので、その間に生まれた作品というのも非常にありますね。中には5〜6ヶ月間かかって、知人から提供してもらった昔のオープンリールの録音テープを巻いていって、最初はピンポン玉みたいに、球体がだんだん巻くことにしたがってテニスボール大になり、やがてスイカの大きさになって。僕はもっと大きくしようと思っていたんやけど、直径25cmの球体くらいになってくると、もう10kgあるんですよ。最後、巻くのが大変なんですね。転がしながら巻いてるという。ここで限度やなことですね。初めのイメージは、直径90cmくらいにしようというイメージを持っていたんです。それが出来なかった。やっぱりやってみないと分からないことがあ

るんですね。だからそういう自分の与えられた環境、小さい家に住んでいたら大きい作品は作れないです。でも、小さくてもまたおもしろいものができるかもしれない。それぞれの人の状況や環境によって生まれるものが、皆それぞれ顔が違うように考えつくことも違うわけですから、いろんなことができるんじゃないかなと僕は思っているんですけどね。

継承されていく表現

妹尾 ポートレートを、毎日撮って何十年も続けておられる、そういうスケール、時間的に長く取り組んでいらっしゃる作品もあると思うんですね。いまだに作っておられるんですか？

今井 《デイリーポートレート》という題名通り、毎日自分の顔写真を撮っているんですね。インスタントの写真ですからすぐ出てくるわけです。ですから、その日の日付を余白の所に記して、昨日の写真を持って撮るんですね。それをずっと続けて43年目かな。最初はそれを別に作品にしようとは思わなかったんです。連続的にずっと、入れ子状にやっていく。なので、一番最初の1枚は何も持ってないです。2日目から持つわけですね。そういう風にしてずっと続けてるわけです。今は、ただただ癖になってね。止められないみたいな。朝起きて歯を磨くような、そんな感覚ですね。ただ心配なことは、「最後の1枚」をどうしようかなと。(笑)こないだ毎日新聞の取材があって、その時初めてポロッと漏らしてしまっただけなんですけど、実は僕の最後の1枚の写真を持っていますね、そこからスタートしたいという後継者が現れたんですよ。そこで僕が思ったのは、アートには完成作、未完成作とかがありますが、どこを完成とするかですね。僕の作品は死ぬまでやると。じゃあ死んだ時が完成か。そうでもないと思うわけですね。

芸術作品というのは、その人の一世一代のものかどうかということ。継承されているものがあるのもいいんじゃないかと思っています。少し話が変わりますが、京都の大文字焼というのがありますね。あれは一つの仏教行事。作者はいないですよ。

アートとして作ったものじゃなくて、宗教的な一つの行事として作られている。でも僕は、山に巨大な字を書くとか、絵も舟形とかありますけどね。まだ芸術という言葉がなかった時代から京都の五山で行われているわけで。これが毎年夏にあるんですね。そういう「継承されていく表現」というのもあっていいんじゃないか、おもしろいなと思うんですね。絵とは何かというと、最初は対象を写し取ったもので、それから抽象的なモンドリアンのような絵が出てきたりもして。そして絵は筆で描くものが、足で描く白髪一雄がいたり、唇で描く林さんがいたり。そういう自由を許された世界というのが、僕はアートだと思うんですよ。だから「それやってなんぼになんねん」とかそんなことじゃないですよ。今、世の中が売れるもの、受けるものとかが流行っていますけれども、そうじゃなくてほんとに自由な。全ての人に分かるということはないと思いますけれど、分かる人は少なくとも深く分かる人とね。また、「あーおもしろい」言うて、次の日になってもう忘れてるというようなね。だからアートとは何かということを問かけけるような作品に、僕は興味があるわけですね。それが具体であったり白髪さんであったり林さんだったりするわけです。

妹尾 まさに今までになかったものをずっと作り続けておられるというのが、お話を聞いてよく分かりました。だから、具体美術協会って、確立されたもののようにあの時代のものみたいなことを、1954年から72年までしかなかったグループではあるんですけど、その精神というものは、受け継いでいける。まさに今井さんがおっしゃったように、別に終わりがなくても良いんじゃないか、誰かがその精神さえ受け継いでくれたら、どんなそれが広がっていくし、覚えておいてもらえる。そういう事なのかなと思いました。

今井 そうですね。

妹尾 身近にできることを実践されているということで、それが例えば40年とか積み上がっていくと、継ぎたいですというようなアーティストが現れて、一つ大きなスケールの作品になってくるということだと思うので。だからこそ、この白髪一雄現代美術賞も、それを継いで、今までにないかたちのアートをやってくれるアー

ティストが次々現れてくれたらいいなと思いますね。

林 具体に参加されていた方々が、個人個人ですごく面白い表現をされていたんだなってことを最近勉強してやっと分かってきたという感じで、その具体の枠組みっていうものは、お話で聞いたりでしか分からないし、その枠組みのニュアンスがあったんだろうなと、想像するしかないんですけど、残された作品だったり、作品と作家さんと共に話を聞いたりすることで、研究していくことはできるなと思っていて、例えば白髪一雄さんが残された作品とその制作環境も実際の映像が残っていますし、この具体っていうものの中で何が面白かったのかというと、一人一人の作家さんが面白かったんじゃないかっていう風に私は個人的には考えてて。それはもちろん今井さんもすごく面白い作品をたくさん作られているし、山崎つる子さん、田中敦子さんとか、白髪一雄さんもそうですけど、個人個人のされていた作品や活動がそれぞれが独特のやり方で残されているという所が私はすごく面白いと思っているんですね。

白髪一雄さんについてだと、商店街にご実家があったこととか、呉服屋さんを営まれていたこととか、能をされていたことが個人的にすごく面白いなと思っていて。これも推測でしかないですけど、能の足さばきというものは、その作品に影響があったんだろうとか、ご本人に聞くことは叶わないですけど。作品タイトルにも能の演目の作品があって、赤い絵具で描かれていた作品に《猩々》(しょうじょう)ってタイトルが付けられていて、そういうコレオグラフとか、舞の譜面のようなものだったのんだろうとか考えるだけでも面白いですし、あと写真に興味を持たれていたという所もあるのかなっていうのが、白髪一雄さんの美術展を昔尼崎市総合文化センターで開催された時の図録を拝見させていただいたんですけど、ステレオスコープで写真を使って立体視を試みたことがあるっていうのを知ったんです。身体的なことはもちろんですけど、当時近代的な技術を使った作品にも注目されていたんじゃないだろうかって、知れば知るほど面白いなと思いますので、より深めていけたらなと思っています。

今井 白髪さんというと足で描いた絵ばかりではなくて、初期の作品ではガラスの瓶の中に何か詰め込んだ作品(《紅い夜》1956年)とか、ちょっとグロテスクな作品が結構あって。狩猟に凝っておられたときには、イノシシの皮をキャンバスに貼った上で足で描いたり。吉原治良さんが「あー、気持ち悪い」って、嫌がってましたけど。そういういろんなことをやりながらも最後の方は白黒だけで足で描いたり、ちょっと寄り道したりすることも大切なのかなという感じがしますね。

妹尾 白髪さんは実際にこの「身体性」という意味で素足で作品の中に入っていったって描くというスタイルだったわけですけど、見る行為にもすごく研ぎ澄まされた感性をお持ちだったみたいです、子どもの頃から見たものを見たままに描ける、そういう技能に長けていたようです。だから逆に見るという行為の大切さを分かった上で、でも自分としての表現というのは油絵具というものに興味があって、油絵具の動き、流動性に対して自分がどう関わっていったら面白いものができるか、という時に「フット・ペインティング」が生まれたのであって、やっぱり素材との出会いというのでしょうか、気づきとかを突き詰めていくことによって、自分の作りたいものが開けてくるのかなと思うんです。さっき林さんがハンコを押していく、押していったズレが自分の行為であり自分の表現というお話がありましたけど、白髪さんもペインティングナイフで消していく行為、絵を消していく動きそのものを絵画化した作品を一時期作っておられたんですよ。だから、消し込むとかそういうことが、既に行きそのものが表現をしているという気付きっていうのと本当に同じだなって。それは使っている素材、キャンバスであったり、筆やペインティングナイフであったりハンコであったりいろんな素材だと思うんですけど、その消していく行為が表現だというのがすごく面白いなって。いろんな所で共通したりすることが、時代を超えてもあると思うんですよね。さっきの今井さんの円のくり抜いた所が作品として表現として成り立つ。ない部分があるからこそ、あるものとして認識されるということですよ。だから林さんの場合でも、吸い取ったからこそ中にあったものが見えた。見えなかったものが吸い取っ

たことによって見える。ただその使う素材であったりやり方は人それぞれあっていいのかなって思います。

展示作品について

妹尾 それでは、今回展示している作品を詳しく林さんからご説明頂きたいと思います。

林 エントランスに展示させて頂いているのが、《裸足の地図》というタイトルをつけている作品で、1分の1スケールの地図を作りたいなということで始めたのが、この裸足の地図です。これは「私たちのフリーハンドのアトラス」という名目で、地図を作るワークショップをされている方がいまして、そのワークショップに参加した時に「既存の販売されている地図というのは本当に正しいのか。」みたいなことを考えるところからワークショップが始まりました。実際に見たわけでもないのに、その図に従って私達は歩いて、それを疑うことなく信じているよねという所から、それをもう少し自分のサイズに引き寄せて地図を作ってみませんか、というワークショップで。例えば自分の腕何本分でこの建物が出てきているのかとか、身長何本分の高さがあるのかを測るというワークショップだったんですけど、それがすごく面白くて。そのワークショップをしたときにこの作品は出来たんですね。2回目が尼崎で、エントランスで展示しているものは阪神尼崎駅からA-LABに来るまでにある橋、玉江橋の上を裸足で歩いて、歩いた部分をフロッタージュしてそのときの感触をメモするという作品です。和室の床の間にもお軸のような形で吊るして展示しているんですけど、それは「アウクスブルク広場」という

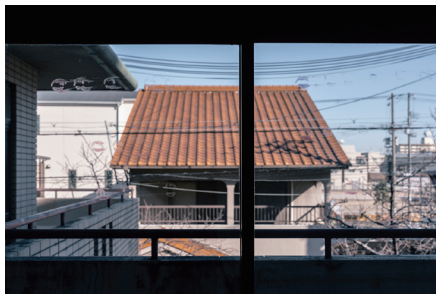


尼崎の姉妹都市のドイツにある都市の名前から来ている広場を転写しています。秋に落ち葉が落ちている状態で転写をしたので、落ち葉の黄色い色素のようなものと一緒に転写されていて面白い作品です。窓枠の所にも作品を展示していきまして、A-LABの隣にある市の坪公園という公園の滑り台だったりベンチだったりをフロッタージュしています。見づらいですけど、窓ガラスにも作品がありまして、これは他のガラス部分にも作品があるんですけど、お豆腐の移動販売車がちょうどこの窓枠に乗って制作しているときに走ってきて、「あ、お豆腐の移動販売車だ」と思って、「お豆腐の移動販売」という風に転写をしています。



《Out of the window》という作品なんですけど、窓の向こうに見えるものと聞こえてくる音を言いまわすという作品を作っています。

廊下の窓にある作品は、A-LABの建物自体が元々公民館で、1階には西長洲保育所という保育所があって、搬入しているときもお子さんたちが遊んでいる声が結構聞こえてくるんですね。「ドッジボールしよう」とか、「おにごっこしよう」とか、「先生もやろう」みたいな。



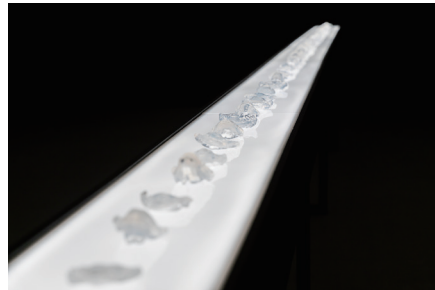
声を1回筆記で聞き取って、書き出してその単語を再構成して窓に自分で言い直した作品が展示されています。またその先の廊下にも作品があります。廊下の壁が長くて15mぐらいあったんですけど、この長さで制作したのは初めてでした。最長で8mが、高松の美術館のときにあったんですけど、15mはだいぶ長くて、だいぶ口が痛くなりました…(笑)

Ｌ字の壁で喋らせてもらっているのが、尼崎に初めて足を踏み入れてからいろいろな方に話しかけてもらった言葉を日記としてつけていて、その日記の内容と、「ヒノデ阿免本舗」という阪神尼崎駅の南側にある水飴屋さんで、町の歴史について聞き取りを行わせてもらって、テキストを再構成して、自分で話し直している作品です。

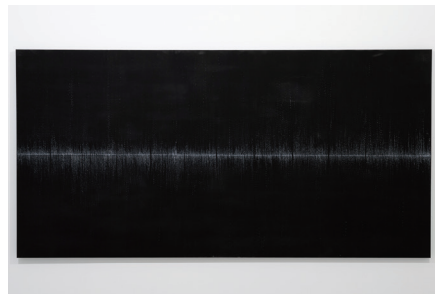


「なかなか水飴は腐らないんです」とか、白髪一雄現代美術賞の授賞式の時に尼崎市の職員さんから「僕も緊張すると早口になるんですよ」と言ってもらった言葉で結構安心したこととか、稲村前市長が「この町は色々な地層で出来ているんです」という話を聞いたこととかを転写しています。ヒノデ阿免の女将さんにこの地域のお話を聞いたんですけど、港に築地という町があって、昔はそこから北に走る電車が通っていて、その電車に乗っていた人がよく飴を買いに来てくれてたんだけど、阪神淡路大震災で建物が壊れてしまって、区画整理で建物自体を大通りから外れた場所に建て替えをせざるを得なくなって、市役所の人達を恨んだという話を聞きました。赤裸々にお話してくださって。その時は、今の尼崎城や図書館がある所に警察署とか映画館とかがあって、賑やかなものがたくさんあったというお話でした。

これはROOM1の展示で、端から50音順に並んでいまして、「あ、い、う、え、お、か、き、く、け、こ…」という風に並んでいます。



鑑賞の際には、お手を触れないでくださいとご案内いただいているんですけど、やっぱり触っていただくと結構感じが違うとか重みが分かったり、こんな所に歯形があるなということが分かったりします。ROOM3で展示しているスタンプの作品ですけど、これもネガポジで白地に黒と、黒地に白というものがあります。これはカレンダーになっている作品で、アルファベットの英語と数字のスタンプで作品を作っています。これは数字だけの作品で、数字の1が左端にあって、右端は31になっています。左端から1月は31日まであるので31になって次に2月、3月…という風に月の日付が書いてあって、それを1回ずつに上と下に押してスタンプの崩れ方を見ているという作品です。タイトルが「a day in the life」、ビートルズの曲名から取っているんですけど、曲の歌詞の内容自体が「人生の1日」という意味で、歌詞の内容も1日の出来事の羅列なんですけど、含みがあったいなと思ってタイトルをつけています。



妹尾 これが芦屋市展の吉原賞を受賞した作品ですか？
林 そうです。縦長の作品とはサイズが違って、小さめのスタンプを使っています。

妹尾 今井さんこの作品、覚えていらっしゃるますか。
今井 あのと1度見たきりなのでね、「あ、これやったんか。」という感じで。だんだん思い出してきました。

妹尾 今井さんに講評もしていただいて。
妹尾 そこで初めてお会いしたということですね。

妹尾 そうですね。こんなに長いご縁があるとは、あのときは思っていなかった。

妹尾 その頃、いろんな公募展に出されていたんですか。
林 そうですね。ことごとく落ちてましたね。あまりにも落ち続けてつらいので、この人に見てもらいたいなってという審査員の方がいらっしゃるものに出すようにはなりました。

妹尾 今井 あの頃は学生だったんですか。
妹尾 卒業した年で、作家を続けられるかどうか瀬戸際みたいな時期でした。

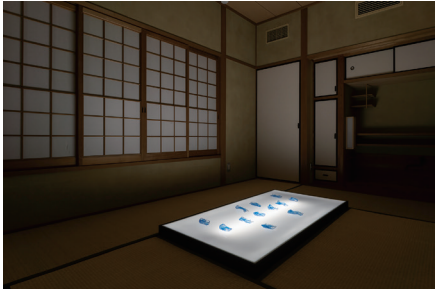
妹尾 今井 大学で教えていたときもいろんな絵があるんですよね。一生懸命描いている、すごく細かく描いている、それも一つの評価ですけど、いろんな事を自由にしていい、こうでないといけないということはないんです。かつての芦屋市展のように過激な作品は少なくなりましたが、たまにそういう作品があったりしてですね。芦屋市展は一つ穴場ではありますね。

妹尾 芦屋で選ばれたときは絵画だったわけですが、今回和室にも作品を出していて、空間を使いこなす表現に取り込んでいますね。

林　そうですね。A-LAB の展示会場自体が自由に作品を展示できる会場ということもありますし、過去のA-LAB の展示に床の間で映像を展示された方がいて、私はじゃあここで何が展示できるだろうなって思ったときに、色々な要素を考えた結果、ちょうど縦長の作品があるし、フィットしていいんじゃないかと思ってこうしたというわけです。元々この樹脂の立体をいつか立てて積んでいきたいなみたいな、欲求がありまして。縦に並んだ塔みたいな風にしたいけど、なかなか技術的に出来ないなと。じゃあガラスの花瓶の中に入れたらどうだろうと考えてこの形になりました。中には「息骨」って喋っている作品を入れています。近松門左衛門の戯曲の中で『出世景清（しゅっせかげきよ）』という演目があって、その中で息骨って言葉が出てくるんですけど、それは「声」という意味で使っている単語で、すごく面白いなと思って息骨という単語を喋っています。

今井　今回尼崎で展覧会をするということで、制作されたんですか。

林　実は、その前から出会っていて。すごく偶然フィットしたんです。私もびっくりして。ちょうど尼崎の現市長の松本さんが来てくださったときに、「近松門左衛門は尼崎に由来があって…」という話をしてくださったと



き、驚いたという。元々去年の4月に「息骨に触れる」というタイトルの個展をしたときに作ったものだったので、なんか繋がったなというところです。これは色つきの樹脂を使っていて、詩人の杉山平一さんが書かれた詩を全部のセンテンスを一気に読むことは出来ないで、単語で分けて読んでいるものです。「暗闇の中でどうして私の耳に声が届くんだろう」とか、こっちは「声」という詩なんですけど、「夕闇が次々色を消してゆく。木の緑、ポストの赤、けれども、夕闇は声を消すことは出来ない。水を使う音、はしゃぐ子どもらの声、僕の歌」という詩を口に樹脂が入るだけ入れて一息で言えるだけの言葉数を言っています。

妹尾　3つ4つの言葉しか言えない？

林　そうですね。最大で5文字ぐらいですね。

妹尾　これはちょうど畳にスポッとするような形で、空間に鎮座するような形になっていますね。

林　この仕器もROOM1 の仕器もA-LAB のスタッフさんが作ってくださって、ほんとにすごいなと。私は樹脂を置いただけみたいな感じです。これはスタッフさんがここで働かれているからこそ出来たのだと思ってます。そういう意味でも、現代美術賞、すごくいいなと思いました。

妹尾　作家さんにプランを出してもらって、A-LAB のスタッフと一緒に空間を作り上げていくというのが、A-LAB の面白いところかなと思います。

今井　白髪一雄現代美術賞というのが、いわゆる普通の彫刻展、絵画展、そういう品評会じゃなくて、いわゆるプラン、あるいは作家の可能性を見極めるという点で審査も非常に難しいかと思いますが、いろんな人が顔ぶれ

を替えながら審査に関わっておられるということで、インスタレーションとかパフォーマンスとか、あるいは音の作品とか、ジャンルに収まりきらない作品も対象にしているという点では、白髪さんも足で描く絵画ではあったけれども、具体の初期にはパフォーマンスもされてたりとか、いろんなことをしていました。そういう点で白髪賞の良さとして踏襲していただきたいなと思っております。

妹尾　ありがとうございます。そうしましたら、最後に林さん、今回こうやって個展をしていただきましたけど、これからこういうことにチャレンジしたいなとか、今氣になっていることとかありましたら、お願いします。

林　はい。先程も少しお話したんですけど、縦に積んで展示ができればいいなと思っています。それがもし実現できた際はぜひまたご覧いただけたらうれしいなと思っています。どのようなやり方が出来るか色々実験しながらになると思いますが。

妹尾　ありがとうございました。それではトークを終了させていただきます。

林 葵衣 | Aoi Hayashi

1988年京都府生まれ

2013年京都造形芸術大学修士課程修了

主な個展に「息骨に触れる」KUNSTARZT(2022)など多数

第1回白髪一雄現代美術賞受賞

第63回芦屋市展吉原賞受賞

音声をはじめとする身体のかたちで独自の形を与え提示している。展示会場で公開制作やワークショップを行うなど、幅広く活動を展開。

関西を中心に個展、グループ展にて作品を発表。

今井 祝雄 | Norio Imai

1946年大阪府生まれ

主な個展に、「NORIO IMAI, "Time Scape"」Axel Vervoordt Gallery,香港・中国(2023)、

「今井祝雄の音 - 開廊20周年記念展 Vol. 3」アート

コートギャラリー(2023)など多数

1965年から具体が解散する1972年まで具体美術協会会員として活動、1970年代には、写真や映像を用いたコンセプチュアルな作品を制作し、野外作品やパブリックアートも手掛けるようになる。その後も国内外で多くの展覧会に参加。

妹尾 綾 | Aya Senoo

公益財団法人尼崎市文化振興財団 学芸員

尼崎市総合文化センター内に2013年に開設された「白髪一雄記念室」に準備から担当者として関わる。記念室の運営の他、同センター美術ホールにおいて「没後10年白髪一雄 水滸伝豪傑シリーズ」(2018年)、「須田剋太×白髪一雄 二人の曼荼羅」(2021年)など、白髪一雄の展覧会を企画、実施。